

## Aluthge変換と finite ascent

棚 橋 浩太郎

**[概要]** Aluthge変換は finite ascent を保存することを示す。

## [本論]

ヒルベルト空間 $\mathcal{H}$ 上の有界線形作用素 $T$ を考える。 $\mathcal{H}$ が有限次元なら $T$ は行列である。さて、Aluthge[1]は作用素 $T$ を $T = U|T|$ と極分解したとき

$$\tilde{T} = |T|^{1/2}U|T|^{1/2}$$

という変換を考えて hyponormal 作用素 ( $TT^* \leq T^*T$ ) の一般化である  $p$ -hyponormal 作用素 ( $(TT^*)^p \leq (T^*T)^p$ ) の性質を明らかにした。この変換はその後 Aluthge 変換と呼ばれるようになり、様々な応用が知られている。この変換には面白い性質があり、例えば  $T$  と  $\tilde{T}$  のスペクトルは等しい (Jung, Ko, Pearcy[2], Cho, Tanahashi[3]) とか、 $T$  が svep (single valued extension property) をもつことと  $\tilde{T}$  がもつことは同値である (Kimura[4]) 等が知られている。

ここでは核 (kernel)

$$\ker T = \{\mathbf{x} \in \mathcal{H} | T\mathbf{x} = \mathbf{0}\}$$

と値域 (range)

$$\text{ran } T = \{T\mathbf{x} | \mathbf{x} \in \mathcal{H}\}$$

の性質について考察する。一般に核については

$$\ker T \subset \ker T^2 \subset \ker T^3 \subset \dots$$

が成り立つ。特に

$$\ker T^n = \ker T^{n+1}$$

となる自然数 $n$ が存在するとき $T$ は finite ascent であるという。このとき、実は

$$\ker T^n = \ker T^{n+1} = \ker T^{n+2} = \dots$$

であることが容易に示せる。

次の命題は svep と finite ascent の関係を明らかにしたもので Laursen [5] によって示された。

**[命題 1]**

作用素  $T$  が finite ascent なら  $T$  は 0 の近くで svep (single valued extension property) をもつ、つまり、0 の近くで  $(T - \lambda)f(\lambda) \equiv 0$  をみたす nonn-zero analytic function  $f(\lambda)$  は存在しない。

**[証明]**

背理法で対偶を証明する。もし 0 の近くで  $(T - \lambda)f(\lambda) \equiv 0$  をみたす non-zero analytic function が存在すると仮定する。このとき

$$f(\lambda) = a_0 + a_1\lambda + a_2\lambda^2 + a_3\lambda^3 + \dots$$

と展開する。ここで

$$a_0 \neq 0$$

としてよい。なぜなら、もし

$$a_0 = 0, a_1 \neq 0$$

とすると

$$f(\lambda) = \lambda(a_1 + a_2\lambda + a_3\lambda^2 + \dots) = \lambda g(\lambda)$$

である。このとき  $(T - \lambda)g(\lambda) \equiv 0$  であるから  $f(\lambda)$  の代わりに  $g(\lambda)$  について以下の議論を行えばよいからである。

さて、このとき

$$\begin{aligned} 0 \equiv (T - \lambda)f(\lambda) &= Ta_0 + Ta_1\lambda + Ta_2\lambda^2 + Ta_3\lambda^3 + \dots \\ &\quad - a_0\lambda - a_1\lambda^2 - a_2\lambda^3 - a_3\lambda^4 - \dots \end{aligned}$$

であるから

$$Ta_0 = 0, Ta_1 = a_0, Ta_2 = a_1, \dots$$

棚橋 浩太郎

である。よって

$$Ta_1 = a_0 \neq 0, T^2a_1 = Ta_0 = 0$$

から

$$a_1 \in \ker T^2, a_1 \notin \ker T$$

となる。従って

$$\ker T \neq \ker T^2$$

である。同様にして

$$a_n \in \ker T^{n+1}, a_n \notin \ker T^n$$

が示せるので

$$\ker T^n \neq \ker T^{n+1}$$

である。

[証明終]

次の定理の (i), (ii) は  $T$  と  $\tilde{T}$  の finite ascent の関係を明らかにしたものである。ここから  $T$  が finite ascent であることと  $\tilde{T}$  が finite ascent であることが同値であることがわかる。

[定理 2]

$$(i) \ker T^n = \ker T^{n+1} \implies \ker \tilde{T}^n = \ker \tilde{T}^{n+1}$$

$$(ii) \ker \tilde{T}^n = \ker \tilde{T}^{n+1} \implies \ker T^{n+1} = \ker T^{n+2}$$

$$(iii) T \text{ が finite ascent である。} \iff \tilde{T} \text{ が finite ascent である。}$$

[証明]

(i)  $\tilde{T}^{n+1}x = 0$  とする。このとき  $\tilde{T}^n x = 0$  を示せばよい。さて

$$\begin{aligned} 0 &= \tilde{T}^{n+1}x = |T|^{1/2}U|T|^{1/2} \cdot |T|^{1/2}U|T|^{1/2} \cdots |T|^{1/2}U|T|^{1/2}x \\ &= |T|^{1/2} \cdot U|T| \cdot U|T| \cdots U|T| \cdot U|T|^{1/2}x = |T|^{1/2} \cdot T^n \cdot U|T|^{1/2}x \end{aligned}$$

であるから

$$0 = U|T|^{1/2}\tilde{T}^{n+1}x = T^{n+1}U|T|^{1/2}x$$

である。よって

$$U|T|^{1/2}x \in \ker T^{n+1} = \ker T^n$$

であるから

$$0 = T^n U|T|^{1/2}x = U|T| \cdot U|T| \cdots \cdots U|T| \cdot U|T|^{1/2}x$$

となる。ここで

$$U^*U|T| = |T|, \ker |T| = \ker |T|^{1/2} \quad (1)$$

であるから

$$0 = |T|^{1/2} \cdot U|T| \cdot U|T| \cdots \cdots U|T| \cdot U|T|^{1/2}x = \tilde{T}^n x$$

となる。

(ii)  $T^{n+2}x = 0$  とする。このとき  $T^{n+1}x = 0$  を示せばよい。さて

$$0 = U|T| \cdot U|T| \cdots \cdots U|T|x$$

であるから (1) より

$$0 = |T|^{1/2}U|T|^{1/2} \cdot |T|^{1/2}U|T|^{1/2} \cdots \cdots |T|^{1/2}U|T|^{1/2} \cdot |T|^{1/2}x = \tilde{T}^{n+1}|T|^{1/2}x$$

である。よって

$$|T|^{1/2}x \in \ker \tilde{T}^{n+1} = \ker \tilde{T}^n$$

であるから

$$0 = \tilde{T}^n |T|^{1/2}x = |T|^{1/2}U|T|^{1/2} \cdot |T|^{1/2}U|T|^{1/2} \cdots \cdots |T|^{1/2}U|T|^{1/2} \cdot |T|^{1/2}x$$

となる。よって

$$0 = U|T|^{1/2} \cdot \tilde{T}^n |T|^{1/2}x = T^{n+1}x$$

となる。

(iii) (i), (ii) より明かである。

**[証明終]**

**[例 3]**

$T = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$  の極分解  $T = U|T|$  は

$$U = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, |T| = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

で与えられる。このとき

$$\tilde{T} = |T|^{1/2}U|T|^{1/2} = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$$

であるから

$$\ker \tilde{T} = \mathbb{C}^2 = \ker \tilde{T}^2 = \ker \tilde{T}^3 = \dots$$

となる。一方

$$T^2 = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$$

であるから

$$\ker T \neq \mathbb{C}^2 = \ker T^2 = \ker T^3 = \dots$$

となる。従って、定理で (ii) の結論を  $\ker T^n = \ker T^{n+1}$  とすることはできない。この意味で (ii) の  $n$  の評価は best である。

次に値域  $\text{range } \text{ran } T$  について同様の考察を試みる。一般に  $\text{range}$  については

$$\text{ran } T \supset \text{ran } T^2 \supset \text{ran } T^3 \supset \dots$$

が成り立つ。特に

$$\text{ran } T^n = \text{ran } T^{n+1}$$

となる自然数  $n$  が存在するとき  $T$  は finite descent であるという。このとき、実は

$$\text{ran } T^n = \text{ran } T^{n+1} = \text{ran } T^{n+2} = \dots$$

であることが容易に示せる。

次の命題は、より一般化された結果 (i) から、finite descent について

も  $T$  が finite ascent であることと  $\tilde{T}$  が finite ascent であることが同値であることを示している。

**[命題 4]**

- (i)  $\text{ran } (AB)^n = \text{ran } (AB)^{n+1} \implies \text{ran } (BA)^{n+1} = \text{ran } (BA)^{n+2}$
- (ii)  $\text{ran } T^n = \text{ran } T^{n+1} \implies \text{ran } \tilde{T}^{n+1} = \text{ran } \tilde{T}^{n+2}$
- (iii)  $\text{ran } \tilde{T}^n = \text{ran } \tilde{T}^{n+1} \implies \text{ran } T^{n+1} = \text{ran } T^{n+2}$
- (iv)  $T$  が finite descent である。  $\iff \tilde{T}$  が finite descent である。

**[証明]**

(i) だけ示せばよい。  $y \in \text{ran } (BA)^{n+1}$  とする。このとき

$$y = (BA)^{n+1}x = B(AB)^nAx$$

となる  $x$  が存在する。ここで

$$(AB)^nAx \in \text{ran } (AB)^n = \text{ran } (AB)^{n+1} = \text{ran } (AB)^{n+2}$$

であるから

$$(AB)^nAx = (AB)^{n+2}z$$

となる  $z$  が存在する。従って

$$y = B(AB)^nAx = B(AB)^{n+2}z = (BA)^{n+2}Bz \in \text{ran } (BA)^{n+2}$$

である。

**[証明終]**

**[注意]** 例 3 の  $T$  については

$$\text{ran } T \neq \{ \mathbf{o} \} = \text{ran } T^2$$

$$\text{ran } \tilde{T} = \{ \mathbf{o} \} = \text{ran } \tilde{T}^2$$

であるから (i) の結論を  $\text{ran } (AB)^n = \text{ran } (BA)^{n+1}$  とすることはできない。この意味で (i) の  $n$  の評価は best である。

[参考文献]

- [1] A. Aluthge, *On  $p$ -hyponormal operators for  $0 < p < 1$* , Integral Equation and Operator Theory, **13** (1990), 307-315.
- [2] Il Bong Jung, E. Ko, and C. Pearcy, *Aluthge transforms of operators*, Integral Equation and Operator Theory, **37** (2000), 437-448.
- [3] M. Chō and K. Tanahashi, *Spectral relations for Aluthge transform*, Scientiae Mathematicae japonicae, **55** (2002), 77-83.
- [4] F. Kimura, *Analysis of non-normal operators via Aluthge transformation*, to appear in Integral Equation and Operator Theory.
- [5] K. Laursen, *Operators with finite ascent*, Pacific Journal of Mathematics, **152** (1992), 323-335.